

# 病院 + 高齢者福祉施設 + サービス付き高齢者向け住宅

## まちづくりの延長としての医療・福祉施設 / 住宅づくり 日常の中に「地域共生」支える建築生み出す

1958年9月の発足以来、数々の病院や高齢者福祉施設などの建築設計を手掛けてきた共同建築設計事務所（東京都新宿区）。同事務所では、人口減少と高齢化が進むなか、高齢者をはじめ全ての人が生き生きと暮らせるまちづくりがまず求められ、その延長として病院や高齢者福祉施設などをつくるべき、と訴える。

基本姿勢は、まちづくりの延長としての施設・住宅づくり。どのような意図か。共同建築設計事務所代表取締役社長の鈴木慶治氏はこう説明する。「人口減少と高齢化が進むなか、障害者や高齢者を支える人の数は減っています。だからこそ、全ての人々が生き生きと暮らせる豊かなまちづくりがまず求められます」。

施設・住宅づくりにはいま、そうしたまちづくりの視点が欠かせない。それは、地域との関係性をどう築いていくか、という点でもある。ここで紹介する2つの事例はともに、「地域共生」という関係づくりに心を砕いたものだ。

最初に紹介するのは、一般社団法人Hauskaa（埼玉県川越市）が川越市内

に2019年7月にオープンさせた「Hauskaaかすみ野」である。高齢者の入居を想定し、運営者側は入居者の安心や健康に結び付く各種サービスを提供する。

### 1階に「パサージュ」を配置し 活気を失ったまちを再構築

サービス提供者は、川越市内を地盤とする医療法人真正会と社会福祉法人真正会、それに一般社団法人Hauskaaで構成する「かすみケアグループ」。主に回復期リハビリテーション病棟を持つ病院やデイケア、特別養護老人ホーム、グループホームなどを運営する。

敷地は、医療法人で運営していた別の病院の跡地だ。そこに、地上4階建



鈴木 慶治氏  
代表取締役社長



山田 明子氏  
第2設計部 部長

株式会社 共同建築設計事務所

での共同住宅30戸を建設した。1階は店舗や事務所で構成し、エントランスホールにあたる「パサージュ」を置いた。2階以上の3フロアには、約40㎡を基準とする住戸を配置する。

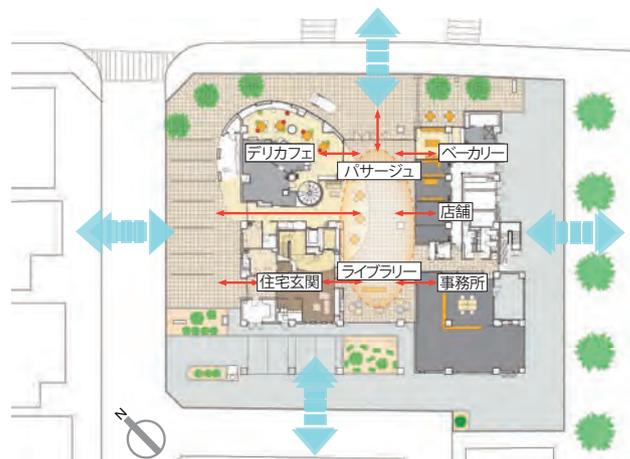
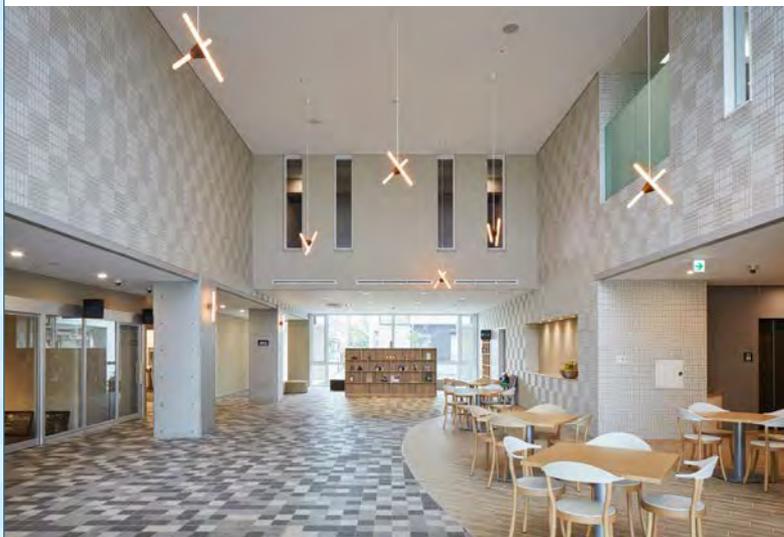
周囲は、高齢化が進む戸建て住宅地。日常の暮らしに不安を抱く高齢居住者がそこから移り住んでくる需要も見込む。鈴木氏は「高齢化とともに活気が無くなったまちの姿を1階に再構築し、そこに住戸を載せました」と解説する。

### ハウスカ CASE01 Hauskaaかすみ野

■所在地/埼玉県川越市 延べ床面積/3082㎡ 構造/鉄筋コンクリート造 階数/地上4階 発注者/一般社団法人Hauskaa 設計・監理/共同建築設計事務所 施工者/川木建設 竣工/2019年6月 施設内容/共同住戸30戸、店舗、事務所 (写真/千葉 眞弥)

1階「パサージュ」は地域開放のスペース。ここから1階店舗・事務所にアプローチできる。壁の仕上げを外部とそろえ、連続性を持たせることで、入りやすさに配慮した。飲食や談話のほか、併設の「ライブラリー」を楽しむことも可能。地域活性化の起点と位置付ける

北東側外観。1階手前に見える店舗が「デリカフェ」。2階以上の住宅部分は4つのゾーンに分節化し、周囲に広がる住宅地への圧迫感を和らげた



配置・1階平面図 (資料提供/共同建築設計事務所)

## CASE 02 東京さつきホスピタル A棟

■所在地/東京都調布市 延床面積/5719㎡ 構造/鉄筋コンクリート造 階数/地上3階 発注者/特定医療法人研精会 設計・監理/共同建築設計事務所 施工者/林建設 竣工/2020年5月 病床数/156床 (写真/増田寿夫写真事務所)

北西側外観。3階部分が渡り廊下でつながるのが、C棟。先駆けて完成したC棟1階では、その発注者の一つである社会福祉法人が地域開放のカフェを運営する。B棟は精神科デイケアなどを提供する施設。A棟の奥に立つ



1階は総合受付や外来・検査部門など、2-3階は病棟部門で構成する。右手側は最寄り駅、左手側は住宅地。この建物沿いに細長く伸びる歩行空間は地域住民が駅方面との間を行き来する生活道路として日常的に利用されている

住戸フロアでは、廊下沿いに直線状に住戸を並べるのではなく、3つの住戸で一つのユニットを構成するような配置計画を採用。「隣近所との関係を感じること、独居であってもここでは一人ではないという安心感を提供することを意図しました」(鈴木氏)。

共同建築設計事務所では、特養を皮切りに、デイケアやグループホームなどの建築設計を手掛け、かすみケアグループとの関係を築いてきた。この「Hauskaaかすみ野」は、その流れの中で建築設計を引き受けることになったもの。まちの再生の一端を担う。

次に紹介するのは、東京都内や神奈川県内で事業展開する特定医療法人研精会と同グループの社会福祉法人新樹会が東京都調布市内に20年6月に開設した精神科病院、東京さつきホスピタルだ。敷地の近くで60年以上にわたって運営してきた病院を移転・新築した。

### 治療に欠かせないプライバシー「地域共生」支える造りに挑戦

移転・新築にあたっては、慢性の統合失調症患者の退院を促す一方で、高齢化によって増える認知症治療の充実を図るなど、地域とのつながりを一段と強化することを決めた。第2設計部部長の山田明子氏は「それによって相反する2つのテーマに同時に挑むことになりました」と話す。

一つは、治療の場としての病院に不

可欠なプライバシーの確保だ。個室の環境を提供することで個人の領域を確保し、短期で治療可能な療養環境を確保しなければならない。もう一つは、地域共生を支える建築だ。「プライバシーを確保するものの閉じこもらないように、病棟内の共用部に出てきてもらえる造りが求められます」(山田氏)。

これらのテーマには、個室型4床室や開放的なスタッフステーションなどの造りで臨んだ。病床は外光を取り込む窓に面するように配置する一方、プライバシーを確保する間仕切り壁や建具を設けた。スタッフステーションはオープンカウンターを取り入れ、医療者と患者の距離を近づけた。「いつでも声を掛けられる環境、見守られている環境が、患者に安心感を提供します」(山田氏)。

地域共生という点では、認知症や児童思春期の患者の増加が見込まれ、精

神科医療の必要性が高まるなか、身近さを感じてもらいたいことも求められる。建物沿いは地域住民が生活道路として利用できる歩行空間として整備し、日常性を強調した。

ここで紹介した2つの事例はいずれも都市部の住宅地に建つもの。地域社会の中に立地するだけに、まちとの関係性は築きやすい。地方部のようにそうした立地条件にない敷地では施設内に疑似的地域社会をつくることを計画するという。右下の事例は、その一例だ。

施設・住宅づくりに今後、どう取り組んでいくか。鈴木氏は「地域の特性を読んで、地域にふさわしいものをつくろうと考えています。かつてのように隔離的な施設ではなく、より身近なものになるほうが、施設にとっても地域にとっても幸せで豊かになれるはず。そこをもっと突き詰めたい」と、意欲を見せる。



写真左は外観。時間の経過とともに味わいを増すレンガ積みを採用した。写真右は「駒ヶ根モール」。各部門がモールに顔を出すように配置するなど、まちのにぎわいを感じさせる造りを取り入れ、疑似的地域社会を表現した

■長野県立こころの医療センター駒ヶ根 所在地/長野県駒ヶ根市 延床面積/1万184㎡ 構造/鉄筋コンクリート造 階数/地上3階 発注者/地方独立行政法人長野県立病院機構 設計・監理/共同建築設計事務所 施工者/ヤマウラ(1期)、岡谷組(2期) 竣工/2012年3月 病床数/129床 (写真/増田寿夫写真事務所)